

7) キハダ=黄蘗

キハダはミカン科の落葉高木で高さは15mに達し、雌雄異株である。樹皮の表面は黄褐色を帯び、その下には厚いコルク層があり、内皮は黄色で苦みがある。葉は長さ約30cmの奇数羽状複葉で対生する。小葉は9枚または11枚が普通で、卵形または長楕円形をしており先が尖り、縁には鈍い鋸歯がある。夏、枝先に円錐花序を出して黄緑色の小花を開き、果実は黒色をした球形である。北海道から九州及び朝鮮、中国東北部、アムール地方など、主にアジアの北の方に広く分布する。和名の由来は内皮が黄色をしているためで、「黄肌」または「黄膚」の意味である。別称としてはキワダ、オウバク、シコノヘ、シコロ、ニガキ、ミョウセンなどさまざま、アイヌではシケルペと呼ばれている。東北地方の別称に多いシコノヘやシコロもアイヌ語から来たものであろう。学名は『*Phellodendron amurense*』で、属名は「Phellos=コルク」と「dendron=樹木」との合成語で、樹皮がコルク質でできていることを表わし、種小辞はシベリアのアムール地方を意味している。イギリスでの呼称は『*amur cork*』、中国では『黄蘗』、『蘗木』である。

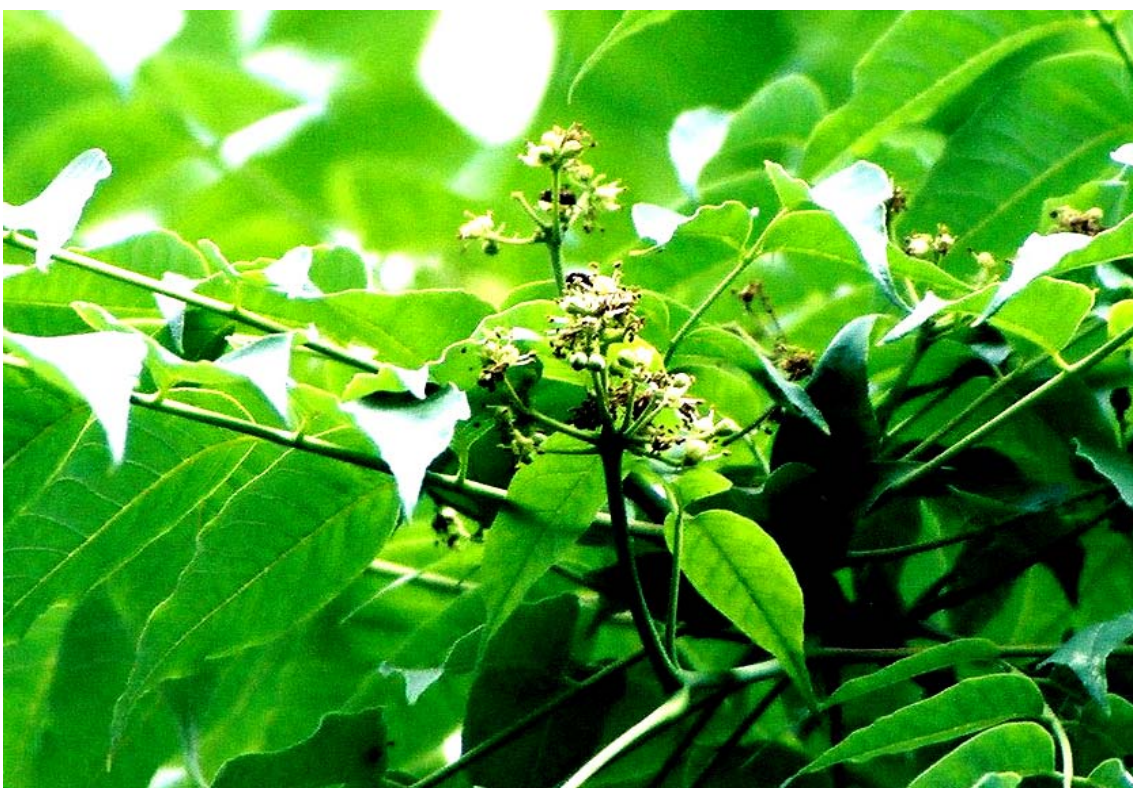
黄蘗は古来より染料として、また薬用としての用途が知られており、当初は黄色の染料として中国から輸入されたい。この染料は同時に虫除けにもなったから、当時としては大変重宝で、写経用の紙も黄蘗で染めており、天平の古文書にも黄蘗染(オウバクゾメ)の黄色紙が見られる。また中国では階級を色で表わすことが古くから行なわれていたが、黄色は最下級で、これを染めるのにも黄蘗が用いられていた。一方アイヌ人は黄色を尊び、信仰に関するものに関してのみ、この黄蘗を用いて染めていた。漢方では樹皮から厚いコルク層を除いたものを『黄柏』(オウバク)または『黄蘗』と記して、消炎、利尿、止瀉に用いた。さらに解毒剤として下痢、黄疸、肝炎、湿疹、腫物、口内炎、肺結核、肺炎、腎炎などの治療に用いることができたから、便利な薬でもあった。民間では黄蘗に千振、現の証拠、青木の葉などを加えた水製乾燥エキスを『陀羅尼助』(ダラニスケ)とか、百草(ヒャクソウ)、練熊(ネリマ)と称して、急性胃腸炎、腹痛、下痢の治療薬として、主に奈良県の山里の茶店や、土産物屋などで売られていた。これは苦みの強いベルベリン系アルカロイドを含んでおり、胃腸機能の改善に役立つほか、血圧の降下作用があるばかりか、粉末を酢で練ったものは打撲傷にも良いとされていた。

キハダはアゲハチョウ科のカラスアゲハやミヤマカラスアゲハの食樹になっている。特にミヤマカラスアゲハは関東地方以南では、比較的深山に産するチョウで、通常のアゲハチョウの仲間が食樹としている、カラタチやサンショウなどは深山にはあまりない。そこでこのキハダを食べて育つというわけである。春夏、年に2回発生するが、夏、谷川沿いの湿地などで吸水しているオスの姿をよく見かける。

キハダの材は固く美しい光沢があるために、家具や工芸品などに多く用いられる。



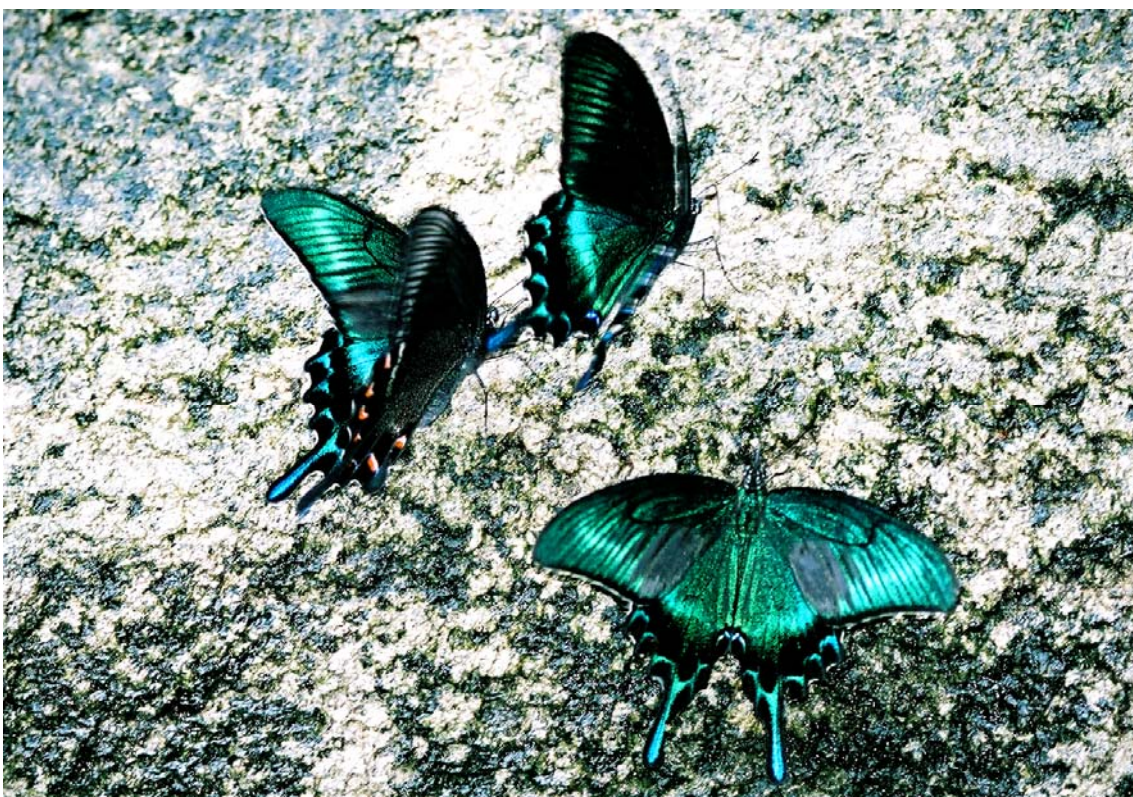
キハダの雌花(東京都小平市薬用植物園)



キハダの雄花は雄株の頂上付近に咲き、花粉を遠くまで飛ばす仕組みになっている。雌雄異株の場合はイチョウなどこのタイプが多い(東京都小平市薬用植物園)。



キハダの若い果実(東京都小平市薬用植物園)。



キハダを植樹として生育するミヤマカラスアゲハ、水の滲み出る岩にやってきて吸水する。ここに集まっているのは全て♂で、その理由は 01-04-00 で述べたとおりである(群馬県上野村)。 [目次に戻る](#)